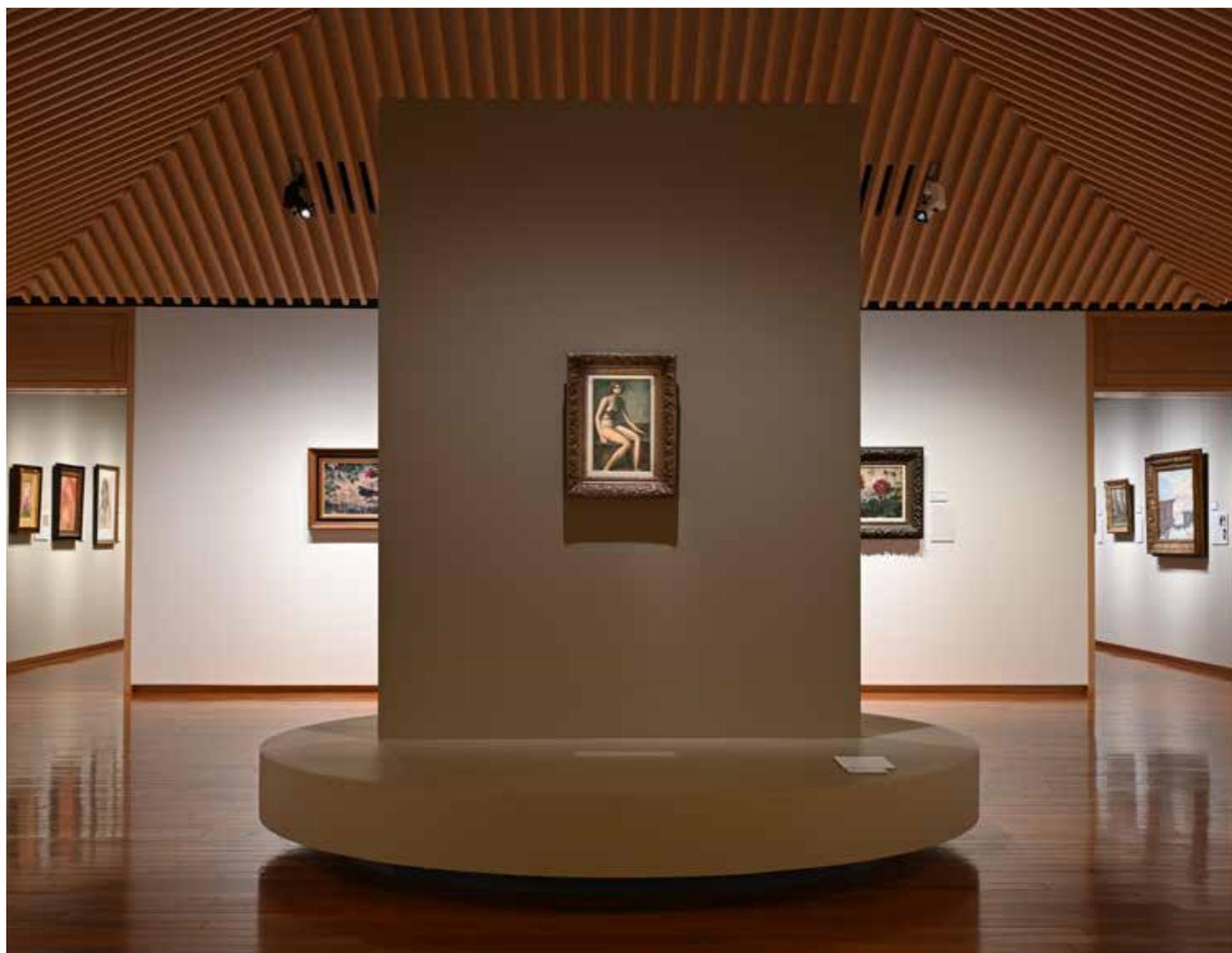


上原 美術館 通信

No.
24

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2024年1月9日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



仏教美術は、仏教が核となり、各地の風土や文化、人々の祈りが、長い時の流れのなかで結実した、いわば結晶です。一方、星の数ほど存在するモノの中から選び抜かれ、収集されたコレクションも、単なるモノの集積を超えて、独自の美意識が生み出した結晶といえます。本年度は、上原美術館の前身の一つである上原仏教美術館が誕生してから40周年となる節目の年。本展は、開館以来、上原美術館が継続して収集してきた仏教美術のなかから、名品を厳選して展示することで、当館の40年間の軌跡をたどる展示会です。

当館が初めて収蔵した古美術は、平成元(1989)年収蔵の、十一面観音像でした。本像は千年以上前の平安時代につくられた古像で、しっかりとした鼻筋、目尻の上がった目は強い意志と若さを感じさせ、どこか異国的な印象も受ける仏像です。

当館は、平成13(2001)年から平成18(2006)年にかけて、平山郁夫と村上華岳の作品を相次いで収蔵し、コレクションを充実させます。しかし、やがて隣接する上原近代美術館との差別化が意識され、次第に古美術収集が見直されるようになりました。転機となったのは、平成19(2007)年収蔵の中尊寺経です。これを機に、古写経の収集を開始し、紫紙金字華厳経断簡などの天平写経や、神護寺経、荒川経など平安時代



十一面観音像 (平安時代・10世紀) 重要美術品



平基親願経 (平安時代、治承四[1180]年)



諸尊図像集断簡 (鎌倉時代・14世紀) ※新収蔵・初公開

の装飾経を相次いで収蔵。古写経収集は、当館コレクションの一つの柱となりました。令和2(2020)年収蔵の平基親願経は当館の古写経コレクションの白眉で、紺地を背景に、美麗に彩色された童子が舞う扉絵が美しい作品です。

古写経とともに、仏像の収集も継続中です。平成20(2008)年収蔵の阿弥陀如来像は、当館の古仏像コレクション第二号。鎌倉時代に多く制作された阿弥陀如来の三尺立像にあって、精緻な衣文と理智的な面貌、足裏に取りつけた足枵を台座上の穴に挿しこむという通例に従わず、踵後ろにうがった丸穴に、台座上に立てた二本の棒を差し込んで立てる特異な構造などから、注目すべき仏像です。当館ではその後も平安時代の薬師如来像、二天像などを収蔵しましたが、制作年代が確定できる仏像が少ない中で、奇しくも同じ文永七(1270)年に造像された阿弥陀如来像と大日如来像を収蔵できたのは、収穫でした。

近年の上原美術館は、古い絵画作品も収蔵しています。「諸尊図像集断簡」は、本年度新収蔵作品。鎌倉時代の密教図像集の、不動明王に従う八大童子を描いた部分の断簡です。鎌倉時代に北条実時が設立した金沢文庫伝来の貴重な作品で、梅原龍三郎の旧蔵品でもあります。上原美術館の40年に渡る収集の「結晶」を是非ご覧ください。(田島)



安井曾太郎《桜と鉢形城址》1945(昭和20)年頃



須田国太郎《枝垂桜》1953(昭和28)年

春の穏やかな空気が想像されます。同月9日には「壬生川へバスで丹原 徒歩で徳田村古田へ しだれ桜をかく」とあります。瀬戸内海 燧灘の近く壬生川から3キロほど内陸にバスで移動し、そこから3キロほど春の陽気の中を歩いて、山の入口にある古田まで辿り着いたようです。そこに聳えるしだれ桜は高さ7メートルにもなる巨木で、その枝ぶりは美しく、その一つは現在、西条市指定天然記念物となっています。須田はその樹形を春霞から浮かび上がるような幽玄な色彩であらわしました。それは油彩画の技法を探索した須田ならではの美しい桜の姿となっています。一方で、そこに漂う気配は須田を魅了した能の世界をも連想させます。

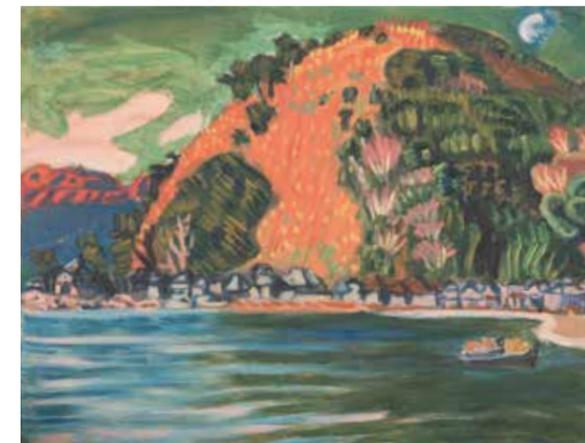
伊豆半島の北西、現在は沼津市となる江ノ浦を梅原龍三郎が訪れたのは、1936(昭和11)年冬のことでした。2月4日に山下新太郎へ送った書簡には、「西風連日烈しく寒さ厳しくがたがたの田舎宿でがんばっています」と記されています。西伊豆では11月から2月にかけて、度々強い西風が吹き、2週間以上も続くことがあります。そして、その風が収まるとにわかには春の気配が近づいてきます。梅原が描く《江ノ浦、残月》には風が凪いだ穏やかな海が広がり、新たな季節の訪れが感じられます。

本展ではそのほか、暗がりの中から桜が浮かび上がる横山大観《夜桜》、あたたかな春の香りを感じさせるピサロ《エラニーの牧場》やモネ《薫ぶき屋根の家》、新たな季節の訪れを歌うマティス《シャルル・ドルレアン詩集》など、春の訪れを感じさせる絵画をご紹介します。上原コレクションより、新たな季節の訪れをお楽しみください。(土森)

花の香り、鳥の声、風の肌ざわり。身の回りには自然は、わたしたちに春の訪れを知らせます。そして、絵の中にもその季節のうつろいが秘められています。

《桜と鉢形城址》は安井曾太郎が第二次世界大戦中、北京から帰って間もなく描かれた風景です。安井は1944(昭和19)年夏、美術展審査のため満州に渡り、北京に立ち寄って制作をしました。年末、北京で病に侵された安井は、そこで療養し、翌年3月に帰国。間もなく埼玉県寄居町に疎開しました。そこで描かれたのがこの風景画です。その美しい眺めには、鉢形城址の下を流れる荒川のせせらぎ、鼻をくすぐる春の香り、空を吹き抜ける風の肌ざわりをも想像させます。戦争が続く困難な時代にも季節は流れ、新たな春が訪れます。

洋画家が描く桜は独特の気配を漂わせます。須田国太郎は1953(昭和28)年4月2日から2週間ほど愛媛県へ写生旅行に出かけました。4月4日には西条市にある西山広隆寺を訪ねます。日記には「バスに乗りかえ徳田村小学校で下車 広隆寺へ 紅白の梅か桜が満開」とあり、四国の山あいの村に訪れた



梅原龍三郎《江ノ浦、残月》1936(昭和11)年



《諸尊図像集断簡(青面金剛図)》鎌倉時代(14世紀) ※新収蔵



《諸尊図像集断簡(八大童子図)》(部分) 鎌倉時代(14世紀) ※新収蔵・初公開

みほとけの姿を彫刻や絵であらわす時、どのような姿をしているか、色は何色かなど、実は決まっています。姿や色はそれぞれ意味を持ち、それが異なるものになると、みほとけの意味も変わってくる場合があります。

彫刻や絵を描く時にお手本となる^{図法}寫本が、みほとけの姿かたちをとどめた「図像集」です。現在伝わる有名な作例は、「十巻抄」(鎌倉時代)や「別尊雜記」(鎌倉時代)などが挙げられます。これらは主に白描(墨線だけであらわしたものでみほとけの姿を描き、色の指定を書き入れたものや、薄く色を塗って、どのようにあらわすのかが分かるようになっています。また、高僧が感得した図像(特別な体験をして得たみほとけの姿)を収集したものもあります。

今回は1月20日から開催する企画展「時の結晶 仏教美術—上原コレクションの40年—」で公開の新収蔵となった「諸尊図像集断簡」二幅の青面金剛図と八大童子図をご紹介します。

日本では庚申講の本尊として祀られる青面金剛ですが、『陀羅尼集經』にはその姿は、体は青く、四本の手を持ち、血のような眼は三眼、頭髮は逆立ち首

には大蛇を巻き付ける、などの特徴が記されます。本図の青面金剛も四本の腕を持つ明王のような姿であらわされています。体には蛇を巻き付ける恐ろしい様相で、足元には邪鬼を踏みつけています。首や頭には鬘の飾りをつけていますが、よく見ると鬘は簡素に点を打たれ、青面金剛の恐ろしい姿と相反して少々ユーモラスな雰囲気が漂います。

もう一幅の八大童子図は、画面むかって右側に図が描かれ、左側に八大童子の姿や色の説明が書かれています。八大童子が描かれる部分は、図の中央には岩座が描かれ、その上に赤い炎が立ち上ります。不動明王は描かれませんが、岩座と炎でその存在を暗示しているのでしょう。岩座の左右には八大童子が控え、鮮やかな色が施され、それぞれの童子には名前が添えられます。どの尊格か分かるようになっています。

八大童子は中国撰述の『聖無動尊一字出生八大童子秘要法品』という文献に姿形が記されていますが、画面左側の文字(P.2参照)はこの『秘要法品』の像法を説いた部分にあたります。文献

の文言と像を照らし合わせると例えば右手前に描かれる阿耨達は「阿耨達菩薩形如梵王。色如真金頂戴金翅鳥。左手執蓮華。右手持獨股杵。而乘龍王」というように、菩薩の形をとり、梵天のような姿で真金の金翅鳥を頭に戴き、左手に蓮華、右手に独鈷杵を持ち、竜王に乗る姿であらわされています。

この二幅の「諸尊図像集断簡」は、鎌倉時代後期に描かれ、元々、金沢文庫に伝来した図像集の一部でした。戦前、北大路魯山人が「不動明王絵巻」として所蔵し、その後幾人かの所有者を経て昭和30年、それぞれの図ごとに分割されました。それらは当時、安井曾太郎、小林古径ら著名な画家の間に分蔵されたと伝わります。本図は日本洋画の巨匠、梅原龍三郎が愛蔵した二幅。梅原は本図を手元に置いて古典からも学んでいたのでしょう。多くの人々の手を経て伝えられてきた仏教美術の結晶をぜひ企画展でご覧ください。

参考文献：
瀬谷貴之「旧北大路魯山人本『諸尊図像集』明王部について：称名寺本『諸尊図像集』との関係を中心に」『金沢文庫研究』345・346 2021年3月 神奈川県立金沢文庫

上原仏教美術館40周年を記念して、上原美術館の絵画コレクションを振り返る特別展『絵画は語る—上原コレクションのストーリー』を開催しました(2023年10月7日～2024年1月8日)。上原コレクションはもともと大正製薬名誉会長の上原昭二(1927年-)が蒐集した絵画にはじまります。家に飾るためだけに集めたそれらの絵画には、個人コレクターの「小さなまなざし」が秘められています。

上原が39歳のときに初めて購入した油彩画はドラム《裸婦》です。当初、この作品を目にしたとき、上原はその良さがあまり分かりませんでした。何か心が残ったといいます。そして、逡巡の末、思い切ってこの作品を購入します。当時はまだ厳格な両親と同居していたため、押し入れに隠してはたまに眺めていましたが、次第にその魅力に引き込まれていきます。背伸びをして手に入れたものが、自らの視野を広げていく。それは誰もが経験することかもしれません。そのときの上原の「小さなまなざし」がコレクションの原点となりました。

上原は有名な画商などが勧めるままに購入するのを嫌い、自らが好きなものだけを選びます。それは、最初の油彩画が日本ではあまり知られていないドラムの小品だったことにも象徴されます。300点以上となる上原コレクションの中でも、最も数が多いのは須田国太郎の作品です。上原は

28歳のとき、父の指示を受けて大正製薬の「鷺のマーク」を考案します。それから20年以上、理想の鷺の絵を求め続けてようやく出会ったのが須田の《鷺》でした。一見、暗い画面ですが、見るほどに味わいが増してくる。そこには、「あせらず 無理せず 背伸びせず」を座右の銘とした上原の等身大の「小さなまなざし」がやはり感じられます。

上原は小学校5年生の頃に両親から島崎藤村全集を買ってもらったことを機に読書に目覚め、学生の頃にはその影響から美学の道を志しました。しかし、第二次世界大戦の影響もあり、自らの夢を諦めて父の会社、大正製薬に入ります。そうした上原の生い立ちには、コレクションにもあらわれています。マルケ《霧のリーヴ・ヌーヴ、マルセイユ》は、第一次世界大戦を避けてマルケが南仏マルセイユに滞在したときの作品。普通に見れば単なる港の風景ですが、読書好きの上原は明治・大正時代の作家のまなざしを重ねました。飛行機がない時代、作家たちがヨーロッパに旅する主な交通手段は船です。東南アジアやインドを経由し、40日ほどかけて辿り着くのがマルセイユ。旅路の最後に遠くに聖堂の尖塔

が見える港の風景を多くの作家が書き残しています。この絵にはコレクターを通じて、明治・大正時代の渡欧した人々の「小さなまなざし」が息づいています。

2023年11月、コレクションの設立者であり、96歳となる上原が久しぶりに上原美術館を訪れました。コレクションとの再会に、たくさんの思い出話に花が咲きました。上原自身は次のように述べています。「私が集めたコレクションはいま手元を離れています。そして、これからは皆様にご鑑賞いただくことで、作品にまつわる新たな物語が紡がれていきます。これから未来に向けて、たくさんの物語が生まれてくることを心より願っております」(書籍『絵画は語る—上原コレクションのストーリー』より)。美術館に収められた絵画、一つひとつにはコレクターや作家、そしてそれを見る人々、たくさんの「小さなまなざし」が宿っています。戦争や災害が続く時代、「小さなまなざし」こそ人々が立ち返るべき視点であると感じます。上原美術館では、「小さなまなざし」、「ひとりの人間のまなざし」を大切に、未来へと紡いでいく活動をこれからも継続していきます。



自宅の上原昭二夫妻。後ろにアルベール・マルケ《霧のリーヴ・ヌーヴ、マルセイユ》が飾られています。1983-85年頃



2023年11月、上原昭二が来館し、自らのコレクションと再会しました。

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、担当学芸員が解説を行いました。

展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。

※要入館券、開催の詳細は当館ホームページ、または公式SNS等をご覧ください。

番組

伊豆の魅力を紹介する旅行番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「仏教美術の宝庫で伊豆の不思議を紐解こう!」(リポーター久保沙里菜さん)の回で、当館が紹介されました(テレビ埼玉、テレビ神奈川、千葉テレビ)。番組YouTubeでもご覧いただけます。また前回ご紹介いただいた「奥が深いぞ! 下田の魅力再発見の旅 後編」(リポーター勝又楓さん)も同サイトでご覧いただけます。

出張授業

9月14日 下田市立大賀茂小学校、下田市立朝日小学校

11月13日 学校法人山崎学園 富士見中学校

大賀茂小学校は鎌倉方面の修学旅行の事前学習で仏像の見分け方のお話をしました。朝日小学校は3、4年生にアートカードを使ったゲーム、および絵画の鑑賞を行いました。富士見中学校は奈良・京都方面の修学旅行の事前学習として現地で拝観できる仏像と見方をお話ししました。

授業入館

10月14日 下田市立下田中学校美術部

11月24日 伊豆市立修善寺中学校、南伊豆町立南伊豆中学校

11月30日、12月8日 下田市立下田中学校

下田中学校美術部は課外活動の一環として、特別展を学芸員が解説しながら鑑賞しました。修善寺中学校、南伊豆中学校、下田中学校は地域学習と、奈良・京都方面への修学旅行の事前学習で、仏像の見分け方のお話や、近代館で絵画鑑賞を行いました。

対外活動

田島上席学芸員が以下の講演、講座を行いました。

「東アジアDNAの源流と、文化・芸術の多様な未来／伊豆仏像文化」(10月15日 於・伊豆の国市葦山時代劇場)は、静岡県が東アジア文化都市2023に選定された関連イベントで、伊豆地域の仏像についての基調講演とコーディネーターとして登壇しました。「かんなみ仏の里美術館ボランティアガイド養成講座」(10月24日、11月7日、21日、12月5日 於・函南町)、「みほとけのキセキII／記念シンポジウム」(11月12日 於・浜松市美術館)は浜松市美術館主催の特別展の基調講演およびパネリストとして登壇しました。「河津秋祭り」(11月26日 於・河津町河津平安の仏像展示館)はフリーアナウンサーの久保沙里菜さんと一緒に南禅寺の仏像群についてトークを行いました。「下田市史講座／江戸時代の仏像」(12月19日 於・下田市市民文化会館)は下田市教育委員会主催の講座で調査から見いだされた江戸時代に造られた仏像についてお話ししました。

菅野学芸員は「下田市史講座／ペリーが見た幕末下田」(10月24日 於・下田市市民文化会館)で講演を行いました。



ギャラリートーク(上:近代館/下:仏教館)



番組『いい伊豆みつけた』



出張授業 朝日小学校



授業入館 南伊豆中学校



対外活動

『せかいでひとつだけのがくぶちをつくろう』

当館学芸員が講師として参加したワークショップの一つをご紹介します。

11月18日、伊東市生涯学習センターにてワークショップ『せかいでひとつだけのがくぶちをつくろう』(主催:伊東市伊東図書館)を開催しました。このイベントには、親子12組、5歳から大人まで29人が参加しました。

はじめにアートカードを使ったゲームにみんなで挑戦します。グループに分かれて、「四角が描かれた作品を探そう」など、小さな子供たちも参加できる簡単なゲームを実施しました。アートカードには上原美術館の収蔵作品が印刷されており、遊びながら自然と作品鑑賞をすることができます。作品に何が描かれているかをじっくりと観察し、おしゃべりしながら絵画に親しみました。

ウォーミングアップした後は、いよいよオリジナル額縁の制作に入ります。先ほどのアートカードの中からお気に入りの作品を選択したら、飾り付けです。段ボールでできたフレームに、カラフルな紙、シール、ビーズ、布、紐やリボンなどをボンドや糊で貼り付けます。フレームには絵画の色を取り入れたり、描かれたイメージにあう装飾をしたりと、各自アイディアを形にしていきます。選んだアートカードとフレームを合わせたら、世界でひとつだけの“マイ・がくぶち”の完成です。参加者のすてきな額縁に彩られ、アートカードもさらに輝きを増します。子どもたちは「帰ったらお家に飾る!」と出来上がった額縁を満足そうに見せていました。

ワークショップの後は、絵画に興味・関心を持った参加者が、隣接された図書館で印象派のモネを紹介した絵本など美術に関する本を借りる姿も見られました。このような活動を通じて、美術作品への理解を深め、美術館での鑑賞も楽しんでいただければ嬉しく思います。(土屋)



書籍発行のお知らせ

開催中の展覧会に合わせて書籍『絵画は語る—上原コレクションのストーリー』を発行しました。コレクター上原昭二のまなざしを辿るように、計38点の上原コレクションを紹介しております。絵画の裏側にあるストーリーをゆっくりとお楽しみいただければと思います。

書籍:『絵画は語る—上原コレクションのストーリー』

判型: B5変型判、144頁、全頁カラー

販売価格: 1,500円

発売日: 2023年11月11日

●購入方法

購入ご希望の方は、カタログ名と冊数、金額、ご住所、氏名、お電話番号をご記入の上、現金書留で代金をお送りください。送料無料でお送りいたします。

*代金受領のご連絡は、図録の発送をもって代えさせていただきます。

送付先: 上原美術館 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341



伊豆だより



館庭であちこち見られるツワブキの花

秋から冬にかけて、美術館の庭にいますと時折、山の奥から叫び声のようなものを耳にします。声の主は鹿。稲^{いな}稗^{ずさ}の山あいには悲し気な鹿の音が響き、まさに「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の……」の歌を思い出します。残念ながら温暖な地域のため、燃えるような紅葉は見られませんが、冬になると冬枯れの鄙びた里山の風景が美術館周辺に広がります。

年を越えて節分が過ぎると、伊豆は早咲きの桜の季節がやってきます。季節の移ろいは早いもので、仏教美術館開館40周年を迎えた今年度の締めくくりの展覧会が1月20日より始まります。近代館は『春の訪れ』。これから華やぐ伊豆の春とともに楽しみください。仏教館『時の結晶 仏教美術』は美しい結晶が長年集積して輝きを放つように、長きにわたり蒐集された仏教美術コレクションから、それぞれの作品がもつ美のきらめきをご紹介します。(櫻井)

令和6(2024)年度 教室受講生募集

上原美術館では令和6年4月からの教室受講生を募集しています。

日本画教室

講師 牧野伸英先生(日本画家、日本美術院特待)

日時 毎月第2・4火曜日 13:00~16:00

デッサン・水彩画教室

講師 小野憲一先生(現代美術作家)

日時 毎月第2・4水曜日 13:00~16:00

仏像彫刻教室

講師 岩松拾文先生・大谷文進先生(仏像彫刻家)

日時 毎月第3日曜日 13:00~15:30

写経教室

講師 山田修也先生(書家、毎日書道展審査会員)

日時 毎月第2日曜日 13:00~15:30

仏教美術講座

講師 当館学芸員(交代)

日時 毎月第2日曜日 10:00~11:00

会場 上原美術館アトリエ(各教室とも)

受講料 無料(用材、写生会の施設入場料等は実費負担)

募集人数 各教室とも若干名、仏教美術講座のみ25名(応募者多数の場合は抽選)

受講条件 全日程参加できる方、ご自分で通える方(お1人1教室のみ応募可) ※初心者歓迎

応募方法 氏名、年齢、住所、電話番号、ご希望の教室名、経験の有無を明記の上、郵便ハガキもしくはEメールにてご応募ください。申し込み締め切りは2024年3月10日(必着)です。美術館受付でもお受けいたします。なお応募結果は3月15日頃、応募者全員に郵送で通知いたします。

お申し込み先 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
上原美術館「教室募集」係

Eメール info@uehara-museum.or.jp

※Eメールでお申込みの方は、お申し込み受付メールを返信いたします。メール送信後、3日以内に受付メールが届かない方はお手数ですがご連絡ください。

次回休館日は2024年4月15日(月)~4月28日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間
9:30~16:30
最終入館は16:00まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引